

マッシュ^な料理人_{が送る、} 異世界のんびり生活。

～強面、筋骨隆々、非常に強い。

でもとっても優しい男が異世界でほのぼの暮らすお話～

著 かむら

絵 日下コウ





グレース

「蒼天の風」所属の僧侶。
隠れ食いしん坊。

アンネリーゼ

「蒼天の風」所属の魔法使い。
人から褒められるのが好き。

ガル

「蒼天の風」所属の
戦闘員。楽家な
獣人。

キリカ

「蒼天の風」所属の
受付嬢。ギルドのム
ードメーカー。

カイン

「蒼天の風」所属の
見習い斥候。いつも
冷静沈着。

メイ

「蒼天の風」所属の見習
い魔法使い。見習い組
をまとめるしっかり者。

シュージ

日本から異世界に転移した、
とっても強くて、とっても優しい
マッチョ。転移前は料理人を
していたため、冒険者ギルド
「蒼天の風」に料理番として
雇われる。

リック

「蒼天の風」所属の
見習い剣士。猪突猛
進するタイプ。

登場人物紹介

第1話 異世界に降り立つ

「……うーん、ここは？」

館野 秀治が目覚ますと、そこは木漏れ日が差し込む森の中だった。

（おかしい。昨夜は普通に家で寝たはずなのだが……）

秀治はむくりと体を起こし、辺りを見渡す。

だが、景色に見覚えがあるはずもなく、自分の状況をいまいち掴むことができない。

とりあえず、自分の体を確認すると、格好は寝ていた時の長袖長ズボンのジャージ姿で、足は裸足だった。

（体は鍛えているから、裸足に関してはそこまで問題はないが……）

というのも、秀治の身長は190センチ近くあり、筋骨隆々。

顔は彫りが深く超強面と、一見ボディガードや裏稼業の人間にしか見えない風貌をしている。

だが、秀治の本業は街の大衆食堂で働く料理人である。

加えて、アマチュア界隈ではかなり有名な総合格闘家でもあるという、二足の草鞋を履いている男だ。

料理人としての腕もさることながら、格闘技の方でも、大会タイトルをいくつも獲ったことがあるくらい実力者である。

そんな異色の経歴なので、時折テレビや雑誌などの取材を受けたこともあった。

本人は運動不足解消のつもりで取り組んでいるだけで、実はそこまで格闘技にモチベーションはないのだが。

(とりあえず、森を出るために少し歩いてみるか)

ここにいっても埒が明かなく思った秀治は、少し警戒しながら森を歩き始めた。裸足なので、足元にも注意しつつ。

(それにしても、見たことない植物が多いな……ん?)

キョロキョロと辺りを見ながら森を進んでいると、何か爆発音のようなものがかすかに聞こえてきた。

これはもしかや人がいるかもしれないと思い、秀治は少し早足で音がした方角へ向かっていく。すると、次第に爆発音の他にも色々な音が聞こえ始めた。

木々の隙間を抜けて開けた場所に出ると、そこでは剣を持った少年2人と杖を持った少女が、黒色の体毛をした狼^{おおかみ}5匹に囲まれていた。

「くそ、このままじゃ……」

3人のうち、赤髪で活発そうな顔立ちをしている少年が、焦^{あせ}りを滲^{にじ}ませた声を上げた。

「大丈夫ですか、君達っ!」

そんな少年達を見て、秀治は咄^ど嗟^そに彼らに向かつて叫んだ。

少年達は秀治の方へと顔を向ける。

「えっ、誰だおっさん!」

赤髪の少年は狼の行動に警戒しつつ、秀治にそう尋ねた。

(お、おっさん……一応まだ26歳なのだが……)

「つて、おっさん丸腰じゃねえか! 助けが来たもんかと……うわっ!」

しかし、そう口にした赤髪の少年は、その直後に狼の体当たりをもちに食らい、地面に転がされてしまった。

さらに、赤髪の少年よりも少し背の高い茶髪の少年の元にも、狼が迫る。

「うわあっ!」

赤髪の少年が倒れてしまったことで、その茶髪の少年は複数の狼に狙われてしまい、防戦一方になってしまう。

「リック様っ、カイン様っ!」

水色の髪の少女が、慌てて倒れた少年達の名前を叫んで、援護をしようと杖を構えた。

だがその瞬間、少女の死角から1匹の狼が飛びかかる。

「待てえっ!!」

それに対して秀治は、横から全速力で駆け寄ると、思い切り踏み込んで体重を乗せた全力パンチを繰り出した。

「ギョインっ!?」

その一撃はグシャッと嫌な音を立てながら狼の骨や肉を砕き、狼の体を十数メートルほどふっ飛ばした。

「大丈夫ですか？」

秀治は助けた少女に声をかけた。

「は、はい……ありがとうございますっ」

そこで倒れていた赤髪の少年が声を上げる。

「お、おっさんまだ来てるぞ！」

「むっ？　ぐっ！」

狼を1匹倒したのも束の間、秀治を脅威と捉えた狼達2匹が、秀治の両腕に噛み付いてきた。

その鋭い牙で噛みつかれたら、当然かなり痛い。

しかし、格闘家として数多の痛みに耐えてきた秀治は、噛み付いてきた狼を腕の力だけで持ち上げ、ブオンッと振り解いた。

そして、すかさず地面に落ちた2匹の狼の首根っこを掴み、まるでとても軽いものを投げるかのようなスピードで地面に叩きつけた。

何かが碎ける生々しい音が響き、2匹の狼はその動きを止めた。

「キャンッ」

そんな秀治の強さに恐れをなしたのか、残りの狼は森の木々の隙間を通って逃げていった。

「ふうう……」

秀治は溜め息を吐いた。

（野生の凶暴な生物相手だから、手加減なしでやらせてもらったが、この子達を守れて良かった）

「お、おっさんすげえ！　ブラックウルフを素手で倒しちゃうなんて！」

「本当に助かったあ……オイラ達だけじゃやられるところだったよ」

赤髪と茶髪の少年達が、土埃を払って立ち上がりながら秀治に賞賛と感謝の言葉を告げた。

「本当に凄かったですっ！　……あ、その腕……」

水色の髪の少女も同じように賞賛するが、途中で秀治の腕に付いた傷痕に気づき、心配そうに声を上げた。

「ん？　ああ、大丈夫だよ。僕、体は頑丈だから」

少女が気にしている秀治の腕は、狼に噛みつかれたことで血がタラタラと滴っていた。

（まあまあ痛い能耐えられないほどではない）

「私、治しますよっ」

少女の言葉に秀治は首を傾げる。

「え？　ああ、応急処置の道具でもあるんですかね？」

「じっとしててくださいね……ヒール！」

少女がそう言いながら秀治の傷口に杖をかざすと、秀治の腕が緑色の光に包まれ、みるみるうちに傷口が塞がり、痛みも薄れていった。

「こ、これはっ……!!？」

「反対側も治しちゃいますね」

その光景は、まさしく魔法そのもの。

秀治が驚いているうちに、反対の腕も完治して、治った腕を動かしてみても全く違和感などはなかった。

少女は嬉しそうに口を開く。

「よしっ、治りました」

「君、今のは魔法……ですかね？」

「え？ はい、回復魔法ですよ？」

「回復魔法……」

まさかのファンタジー要素に、秀治はかなり驚いていた。

それに、切羽詰まっていたあまり気になつていなかったが、リックと呼ばれた少年の髪は鮮やかな赤色だし、傷を治してくれた少女の髪は綺麗な水色。

おおよそ日本では見たことない髪色だ。

（ここは……もしかして異世界なのか？）

近頃書店に行くと、異世界に転移するライトノベルが置いてあって、そういうものが流行っているという知識は秀治にもあったが、まさか自分が転移するなんて思ってもいなかった。

（だが、そういう者には世界を救うみたいな使命があったりするんじゃないのか？ ……ここで考えても分らないか）

「あの、まだどこか痛みますか？」

考え事をしていて顔が険しくなっていた秀治に、少女が心配そうに声をかけた。

「あ、いや、大丈夫ですよ。凄い魔法ですね」

「まだまだ修業中ですから、あんまり深い傷とかは治せないですけどね」

「ところで、おっさんはこんな所で何してるんだ？ 裸足だし、見たこともない格好だし」

赤髪の少年が、秀治に至極真つ当な疑問をぶつけてきた。

「ああ……」

その質問に秀治は少し考え込む。

（異世界から来たと素直に言つて良いんだろうか……？ ……いや、今は申し訳ないが誤魔化すことにしよう）

そう考えて、秀治は口を開いた。

「それが……いつの間にかこの森で倒れていたんですよ」

「いつの間にか？ うーん、転移門の事故とかでふっ飛ばされたとかかな？」

「それかもしれません」

転移門が何かは分からないが、秀治はとりあえずその勘違いに乗っかっておくことにした。

「行く当てはあるのか？」

「うーん……見知らぬ土地ですから、全くありませんね」

「なら、俺達が拠点^{きょてん}にしている街に行こうぜ！ とりあえず、誰かに聞けば、おっさんの境遇も分かるだろうし！」

「それはありがたいです。案内を頼めますか？」

「おう、任せとけ！」

こうして、秀治の異世界（？）生活が始まった。

◇ ◇ ◇

「おお、ここが……」

「ここが、俺達が拠点にしている冒険者ギルドがある、ヤタサの街だぜ！」

少年達の案内で森から1時間ほど歩いて辿り着いたのは、木材や石材で造られた西洋風の建物が立ち並ぶ綺麗な街だった。

太陽の位置的に、現在は昼下がりといったところだろうか。通りには沢山^{たくさん}の人が歩いている。

そんな人混みの中には、獣の耳や尻尾^{しっぽ}が生えた人や、背中から羽が生えた人なんかもいる。

秀治は倒した狼を担いで歩いているため、その中でも一際目立っていた。

通りを眺めて、秀治は改めてここが異世界なんだと実感する。

「すみません、通行料を払ってもらいました」

通行料を肩代わりしてくれた赤髪の少年リックに、秀治はお礼を伝えた。

「気にすんなって！ それに、シュージが肩に担いでるのを売れば、十分お釣りが来る。その時に返してくれればいいよ！」

「助かります」

この街に来る間、秀治は少年達とお互いについての情報交換を行った。

この世界のこともそれとなく教えてもらったのだ。

その中でとりあえず分かったのは、まず赤髪の少年がリック、茶髪の少年がカイン、水色髪の少女がメイという名前であること、お金の価値が日本とほぼ同じなこと、時間や暦の進み方も日本とほぼ同じなことである。

ちなみに、秀治は「シュージ」と呼ばれることになった。

リック達は冒険者と呼ばれる職業に就いていて、先程倒した狼のような魔物を討伐したりして、生活しているそうだ。

魔物というのは、この世界では基本的に害獣とされている生き物で、使役^{しえき}して働かせることもあるが、野生の魔物は基本的には討伐対象らしい。

そして、リック達はこの街にある冒険者ギルドに所属していて、今回は森にゴブリンという魔物を討伐しに来ていたそうだ。

しかし、なぜかあの場所にはいないはずの狼（名をブラックウルフと呼ぶらしい）に遭遇してしまい、ピンチに陥っていたところ、秀治——シュージが現れたというわけだった。

「本当に、僕がこのブラックウルフの報酬をもらって良いんですか？」

シュージの問いに、茶髪の少年、カインが答える。

「もちろん。オイラ達は何もやってないし」

「私達はゴブリンの報酬もありますし、気になさらないで大丈夫ですよ」

メイもそんな風に言ってくれる。

ちなみに現在、シュージは肩にブラックウルフの死骸を3体分担いでいる。

ブラックウルフの素材は人気らしく、1匹約3万ゴールドで買い取ってくれるそうだ。

街にある大衆食堂で1食食べるのに1000ゴールドかからないくらいいいので、3万ゴールドは日本円で3万円ほどの価値だ。

「お、見えてきたぜ！　ここが俺達が所属してるギルド、蒼天の風だ！」

そう言ってリックが指をさした方向、街の入り口から15分ほど歩いた所にその建物はあった。

「おお……大きな建物ですね」

建物は3階建てくらいの高さがあり、一般的な学校の校舎と同じくらいの大さを誇っている。表の看板には大きく「蒼天の風」と書いてあった。

（ん？　そういえば、看板の文字は異世界のものののに、普通に読めるな）

見たこともない文字のはずだが、まるで日本語であるかのように読むことができる。

（うーむ、異世界に来た特典のようなものなのだろうか……まあ、考えても分からないな）

「おい、シュージ入んないのか？」

看板を見て不思議そうな表情を浮かべるシュージに、リックがそう言ってきた。

「あ、すみません。今行きますね」

シュージはリックの声で我に返り、気を取り直して建物の中へと歩を進めた。

中に入ると、少し進んだ所に受付があり、その手前には掲示板のようなものと、会議で使うような大きな丸机がいくつか置いてある。

今は受付の場所以外には誰もいない。

シュージはとりあえずリック達についていき、受付の場所まで来た。

「キリカ姉、ただいま！」

「あら、リック、カイン、メイ、おかえり。えっと、そちらの方は？」

リックがキリカと呼んだその女性は、恐らく20代前半くらいの若くて小柄な女性で、黒に近い青髪を頭の後ろで纏めていた。

「あ、どうも。館野秀治と申します。あ、秀治が名前です」

「シュージさん、初めまして。私はこのギルドで受付や事務をしているキリカと申します」

（この世界の人は、「シュウジ」より「シュージ」の方が発音しやすそうだな）

シュージがそんなことを考えていると、リックがまた口を開く。

「キリカ姉、色々あったから聞いてくれよー」

それからリック達は、シュージとの出会いや、シュージがどのような境遇であるかをキリカに説明した。

「えっ、ブラックウルフと!?」

話を聞いていたキリカがそう驚くと、メイが説明を加える。

「私達、森の入り口にいたのに、奥地にいるはずのブラックウルフがいっぱい出てきて……」

シュージ様に助けてもらえてなかったら今頃……」

「それは災難だったわね……シュージさん、私達のギルドの新人達を助けていただき、ありがとうございます
ございました」

キリカはシュージにそう言つて深々と頭を下げた。

「ああ、いえいえ。成り行きでしたからお気になさらず」

「今回の件は異変として他のギルドなどにも伝えておきますね。それで、シュージさんはこれから

どうするんですか？」

キリカに問われ、シュージは素直に答える。

「それが、行く当てがなくて困っているんですよえ」

「なあ、シュージ！　そんだけ強いなら、冒険者になれば良いんじゃないか？」

リックがそう元気に提案してきた。

「冒険者ですか？　……うーん、ですが、僕はあまり戦うのが好きではないんですよ……」

「えっ、あんなに強いのに？」

「もちろん、やむを得ない時や仕事の時は戦いますが、好き^{こゝろ}好んで戦おうとは思えなくて……」

「他に何か特技とかはありますか？」

そんなキリカの質問に、シュージはとりあえず自分ができていることを答える。

「そうですね……あ、一応料理や家事などは得意ですよ」

「そういうことなら、うちのギルドの用務員として働きませんか？　丁度、この前まで掃除などを

受け持ってくれていた方が年齢を理由に退職されたので、新しい方を探していたんです」

「お、それはいいですね。ですが、この場で決めちゃっていいんですか？」

「はい。人事に関しては一任されてますから。私、人を見る目はあるんです」

「そうなんですね。ぜひお願いします」

シュージはキリカの提案に乗っかることにした。

（就職先がこんなに早く決まるとはな。リック達の話聞くに、かなり良心的なギルドらしいから、大丈夫だろう）

「では、先代の用務員さんが残してくれた簡単なマニュアルがありますので、後でお渡ししておきます。今はとりあえず、そのブラックウルフをなんとかしましょうか」

ずっとブラックウルフを担ぎ上げたままのシュージに、キリカは氣を利かせてそう言った。

「……うん、リック達のゴブリン討伐の証明もできたから、依頼達成よ」

続けてキリカはリック達の方を向いて、そう口にした。

「よし、じゃあ街に遊びに……」

「だめですよ、リック様。この後は武器の手入れをして、食事の準備もするんですから」

リックがウキウキとした様子でそう言うが、メイがビシャリとそれはダメだと言いつつ。

「うえー……そうだった……でも、月末だから大した食材は残ってないぞー？」

「それでどうするか考えるのもオイラ達の役目だよ」

カインの言葉を聞いたシュージは、氣になったことを質問する。

「食事はカイン達がつってるんですね？」

「うん。冒険者になると野営もあるから、自炊ができた方がいいって言われてる。だから、オイラ達見習いや、野営経験の少ない人が練習がてら作るようになってるんだ」

「では、良ければ僕も食事の手伝いをしていいですか？」

「シュージさんは、本当に料理もできるんですね……」

キリカがそう呟く。

「そうですね。ある程度はできますよ」

「とても助かります。実を言うと私を始め、ギルドのメンバーに料理が凄く上手という人はいないので、ちゃんとした知識を教えていただけると助かります」

「分かりました。あ、もちろん、全部はやらす、練習になるようにはしますの」

「ふふ、シュージさんは氣が回りますね。はい、それをお願いします」

異世界初日にして、シュージは就職先を確保したのであった。



「蒼天の風」で世話になることになったシュージは、夕食の準備まではまだ少し時間があるそうなので、先にギルド内をキリカに案内してもらっていた。

ちなみに、靴は先程スニーカーのようなものを貸してもらった。

もしもの時のための備品だそうで、使う人はあんまりないから気にせず使っていそう。

流石にいつまでも裸足というわけにはいかないの、シュージはありがたく使わせてもらっている。

「こちらが鍛冶場や解体場があるエリアです」

そんな中、キリカの案内でギルドの一階にあるかなり広いエリアにやってきた。そこは色々な道具や大きな釜^{かま}などが置いてあり、熱気に満ち溢れた場所だった。

そのエリアの一角に、小柄なキリカよりもさらに低い身長ながら、筋骨隆々としていて、立派な茶色の髭^{ひげ}をたくわえた^{たくま}逞しい男性がいた。

「ジンバさん、お疲れ様です」

「む？ おお、キリカか。どうした？」

その男性はジンバという名前らしく、キリカに声をかけられると、座っていた椅子から立ち上がってこちらに体を向けてきた。

「魔物の解体を頼みたいのと、今日から新しい用務員さんが入ることになったので、紹介しに来ました」

「シュージと申します。よろしくお願いします」

シュージはそう言って、ぺこりと頭を下げて挨拶^{あいさつ}をした。

「そうか。儂^わはジンバという。このギルドの鍛冶場や解体場の責任者じゃ。それにしても、お主は戦闘員じゃないのか？」

挨拶と共に、そんな至極真つ当な質問をジンバは投げかけてきた。

「そうですね、あんまり戦いは好きではなくて……」

「ふむ？ ガタイはいいのに？ まあいい、その肩のやつはこっちに置いとけ」

「あ、はい」

言われた通りシュージは、ブラックウルフの死骸を指定された場所に降ろした。

「ほう、こいつは凄いの。ブラックウルフが殴り殺されておる。本当に戦闘員じゃないのか、お主？」

「あはは……まあ、もし戦闘が必要ならば頑張ります」

苦笑いするシュージを見て、キリカが口を開く。

「大丈夫ですよ、シュージさん。もしかしたら非常時にはお願いするかもしれませんが、戦いを好まない人には、無理強いはしませんから」

「そう言ってもらえると助かります」

「まあ、用務員が来てくれるのは助かる。前の爺^{じい}さんが辞めてから掃除が面倒での」

ジンバのそんな言葉通り、鍛冶場はテーブルや床に色んなものが転がっていて、掃除のしがいがありそうな状態になっていた。

「任せてください。体力と丁寧さには自信がありますので」

「頼もしいの。ブラックウルフの報酬は後で振り込んでくぞ」

どうやらこのギルドでは、依頼や討伐報酬、そして給料は各自の口座に振り込んで管理するシステムらしい。

「あれ、そういえばミノリさんはいないんですか？」

キリカが知らない名前を出しながら、ジンバにそう尋ねた。

「ああ、あいつは欲しい鉱石があると言って、ダンジョンに行った。数日は帰ってこんな」
知らない名前が出たことで、シュージはジンバに質問をする。

「そのミノリさんというのはどちら様でしょう？」

「この鍛冶場を使うメンバーの1人じゃ。儂が武器、あやつが防具の製作を主に担当してる」

「なるほど。そのうち、挨拶したいですね」

「となると、今日は見習い組の3人に、私とジンバさん、あと夜にはギルマスと数人が帰ってくるくらいですね」

キリカの呟きを聞いて、シュージは再び疑問を投げかける。

「このギルドには何人いるんですか？」

「20人はいくらいですよ。うちは少数精鋭なんです」

「普通のギルドはもっと多いんですか？」

シュージのイメージだと、こういう組織はかなりの人数がいるものだと思っていたが、そうでもないらしい。

「そうですね。大きな所だと1000人を超えたりもします。ギルドによって、どういう活動方針かはまちまちですね」

「なるほど」

「うちのギルドは割と自由な方針なので、各々がするべきことを自分達で感じる感じです。リック達見習いの3人には、他のメンバーが戦闘技術であったり、座学だったりを教えていますね」

そんな風にギルドのことをしばらく教えてもらっていたが、ジンバもキリカもまだ少し仕事が残っているそうなので、シュージは2人とは一旦別れ、食堂へと向かった。

このギルドの食堂は、1階の鍛冶場とは反対側の場所にある。部屋の中には、いくつかの大きなテーブルと椅子が並べられていた。

そして、併設されている厨房は風通しの良さそうな広いオープンキッチンになっていて、料理している様子を見られるカウンター席もあった。

シュージが食堂のキッチンを覗いてみると、そこにはリック達が既にいた。

「おっ、シュージ！」

厨房に入ってきたシュージを見つけたリックが、声をかけてきた。

「お疲れ様です、3人とも。これから夕食の準備ですかね？」

「そうなんだけど……」

シュージの言葉を聞いたカインが、困った様子を見せる。

「どうしたんですか、カイン？」

「食材があんまりなくて……」

「これは、冷蔵庫ですかね？ 見てもいいですか？」

「あ、うん」

シュージが厨房にあったかなり大きな冷蔵庫を開けてみると、そこにはいくつかの食材が入っていた。

「ふむ、僕が知ってる食材に似ているものが結構ありますね。こちらは何ですか？」

「それはポテト……ちゃんとした名前はツインポテトっていう野菜だよ」

カインが示したのは、2つの丸いじゃがいもがくっ付いた、ツインポテトという野菜。

これは余つてると言っているくらい、かなりの量が冷蔵庫の中に入っていた。

「この野菜は何でしょう？」

「それはキマグレタスだな」

続けてリックがシュージに教えたのは、地球で言うところのレタスに似た野菜。

形はレタスではあったが、冷蔵庫に入っているキマグレタスはサイズが大小バラバラだ。

シュージが理由を尋ねると、キマグレタスはどれくらいの大きさに成長するかは気まぐれという、その名に相応しい要素のある野菜だと判明した。

「ふむふむ、こちらのちよつとだけある加工肉っぽいものは？」

シュージの質問に、メイが答える。

「それはオーク肉の塩漬けですね」

唯一残っていた肉は、オークという魔物の肉だった。

色や形は違うが、シュージは触ってみた感じ、扱い方は地球の豚肉と同じで大丈夫だと判断した。調味料に関しては、塩、胡椒、砂糖などの基本的なものから、牛乳、サラダ油、オリーブオイル、酒に酔といったもので揃っていた。

その他は、卵がそれなりの数あり、果物も少し余っている。

加えて、主食として食パンが大量に残っており、どうやらこれが今ある食材全てのようなだった。

「やっぱり月末は食材が尽きるなあ……」

リックの呟きにメイが反応する。

「リック様がこの前、盛大にお肉とかを焼いちゃうから……」

「だ、だって美味そうだったし……」

「ふむ、3人ならこの状況で何を作りますか？」

シュージの質問にメイが答える。

「うーん、しょうがないからふかしポテトとかですかね……？ あとはサラダ……」

「塩漬け肉は使わないんですか？」

「これだけしかない、全員にはちよつとしか行き渡りませんから、中途半端になってしまします」

「なるほどなるほど」

そう言いながら、シュージは考え込む。

「うーん、この世界ではあまり料理が発達していないのか？ リック達があんまり得意じゃない可能性もあるが」

「シュージ様だったら何を作るんですか？」

メイにそう聞かれたシュージは、少し考える素振りを見せた後、3人に指示を出していく。

「そうですね……そうしたら、手順は僕が教えますから、色々と3人に作ってもらいましょう。まず、僕とカインはポテートの皮剥きを」

「うん、分かった」

「メイは食パンを指に乘るくらいの賽の目状に切り分けてください」

「はいっ」

「リックには少し力仕事をお願いしますね？」

「え、料理なのに力仕事？」

そう言うて不思議そうにするリックに、シュージは手頃なサイズのポウルに卵黄と酢と塩を入れて渡した。

「はい。ポウルに入れたこちらのものを、泡立て器で素早くかき混ぜてください」

「よく分かんないけど、分かった！」

「液がもつたりとしてきたら教えてくださいね」

とりあえず、シュージが見習い組の3人にそれぞれやることを教え、作業に取り組んでもらう。

（夕食まではまだまだ時間はあるようだから、少し手間がかかっても大丈夫だろう）

カインとシュージは沢山のツインポテートの皮を剥く。

カインはピーラーを使ってるのに対し、シュージは包丁でくるくると凄い速さで剥いていく。

「わあ……シュージ凄いな……」

カインが驚きの声を上げる。

「はは、慣れですかね、この辺は」

料理人としての経験の違いだろう、とシュージは考えた。

「もしかして、シュージって結構凄い料理人？」

「一応、お店で働いたりしてましたね」

シュージは日本にいた頃、食堂で出す料理はもちろん、家での食事もほとんど自分で作っていた。格闘家という側面もあったので、体作りのために栄養バランスを考えてそうしていたのだ。

もっと色々作りたいし食べたい、と常日頃から考え、本やネットでレシピをよく眺めていた。

おかげで、料理の知識に関してはかなり豊富なのだ。

「シュージ様、これくらいでいいですか？」

今度はメイが、賽の目状に切った食パンを見せながらそう言うてきた。

「はい、そのくらいあれば大丈夫です。そうしたら、切った食パンにオリーブオイルを塗って炒め

てもらえますか？」

「パンを炒めるんですか？」

「はい。お願いします」

メイが作っているのはクルトンだ。

ただのサラダでも、クルトンが少し載っているだけで、かなりアクセントにはなる。

「うおお……腕が痛い……これくらいでいいのか、シュージ……」

苦しそうな声色でリックがそう聞いてきた。

「うん、いい感じですね。ありがとうございます。まだ混ぜる作業があるんですけど、いけますか？」

「うえっ!? んー、ちよつときついかも……」

無理をさせるのは本意ではないので、シュージはリックと作業を変えることにした。

「はは、全然いいですよ。そうしたら、僕と交代しましょうか。ポテートも粗方剥き終わったので、リックはポテートをフライパンでこまめに転がしながら柔らかくなるまで温めておいてください。カインは塩漬け肉をかなり小さめのサイズに切つて、別のフライパンでカリッとするまで焼いてください」

「はい！」

「分かったよ」

シュージの指示にリックとカインが返事をした。

「シュージ様、私はこの後どうすればいいですか？」

「ああ、そうしたら……」

その後も見習い組の3人に手伝ってもらいつつ、シュージは夕飯を作っていくのであった。

第2話 料理を振る舞う

「なあ、ギルマスー？」

「何だ？」

「どっかで飯食っていかねー？」

日が沈んだ後、ヤタサの街の大通りを、3人の男女が歩いていた。

1人は若くて活発そうな顔立ちに、狼のような耳と尻尾を生やした獣人の男、ガル。

もう1人は勝気な表情で、狐のような耳と尻尾を生やした獣人の女、シャロ。

そして、その2人の前を歩くのは、綺麗な金髪を携え、腰に剣を差した男。

この男は、シュージが所属することになった冒険者ギルド、蒼天の風のギルドマスター、ジルバートだ。

今はガルがジルバートに夕食をどこかで食べよう、と提案しているところだった。

その提案に対して、ジルバートが口を開く。

「ギルドに戻ればあるだろう」

「いや、だって今日月末だろ？ どうせろくなもんじゃねえしさ」

「……まあ、そうかもしれないが、お前の責任でもあるだろう」

「そうだけ……」

「そうよそうよ。どちらかと言えばあの子達に教える側なのに、何でアンタが悪いこと教えてるのよ」

ガルを責めるように、シャロがそんなことを言う。

彼らは現在、自らの拠点であるギルド、蒼天の風への帰り道を歩いていた。

朝から、依頼を受けて魔物の討伐に行っており、当然かなり腹が減っている。

だが、先日ここにいるガルが見習いのリックをそそのかし、大量に肉などの食材を消費したのだ。

そのため、ここ数日、ギルドの飯は中々質^{しそ}素なものとなっている。

当然、リックとガルはきついお叱りを受けたが、なくなった食材が返ってくることはない。

加えて、食材を新たに買ったりすることもしなかった。

新たに買ったなら、また同じようなことをしても、許されると思うかもしれない。ジルバートはそう考え、ギルドの全員が不満を漏らすような食事にあえてさせている。

それもあつてか、リックとガルは物凄く反省していた。

だが、それを決めた当人のジルバートにとつても、きついものはきつい。

今日はガルとシャロの指導が主だったので、ジルバートはそこまで運動をしたわけではないのだが、一日中立ちっぱなしでそこそこ疲れているのは事実だ。

こういう疲れている時こそ美味いものを食べたいのだが、恐らく待っているのは、ふかしポテトと簡単なサラダとパンくらいだろう、とジルバードは考えた。

ジルバートでもそうなのだから、若くて食欲がある上に、今日一日戦い続けたガルとシャロはもつときつい。

そうこうしているうちに、3人はギルドに着いた。

「やつと着いた……って、なんか騒がしくねえか？」

「そうね？ 食堂に集まってるみたい」

耳のいいガルとシャロは、食堂に人が集まっていることに気が付いた。

ギルドに入り、3人はとりあえず荷物と武器などをエントランスの机に置いて、真っ直ぐ食堂に向かう。

そこには今日いるメンバーが勢揃いしていて、キッチンの方には3人にとっては見慣れないガタイのいい男、シュージが立っていた。

「あ、ギルマス。おかえりなさい」

ジルバートに気付いたキリカが声をかけた。

「ああ、今戻った。キリカ、これは何の騒ぎだ？ それと、あそこにいる男は？」

「あの人は今日、用務員として雇うことになったシュージさんです。騒いでたのは、シュージさんが作ったご飯が美味しかったからですかね？」

「……戦闘員ではないのか？」

ジルバートから見ても、シュージは戦闘向きの体つきだった。

「戦える力がありますけど、本人はあまり戦いが好きじゃないそうですよ。まあ、そういうのは後にして、今はご飯を食べてみてくださいよ」

「……まあ、そうだな」

それからジルバート達が席に座ると、あれよあれよという間に見習い組達が料理を運んできた。

「おお！ なんか美味そう！」

「見た目は焼いたポテートと普通のサラダだけど、何でか美味しそうね」

料理を見たガルとシャロが、嬉しそうにそう言った。

運ばれてきたのは、ツインポテートに刻まれた塩漬け肉が入った一品と、キマグレタスの上に薄茶色の物体と白い液体がかかっているサラダだった。

その料理を見て、ジルバートもガルもシャロもツインポテートの料理から手をつけた。

「ほう、これは……」

「お！ これ美味いな！ ポテートなのに、肉食ってるみたいだ！」

「胡椒が丁度いい感じにピリツとして美味しい！」

すると、ジルバート、ガル、シャロから驚きや賞賛の声が上がった。

ガルとシャロの言う通り、ツインポテートからはしっかりと肉の風味が感じられ、味付けは塩胡椒だけのシンプルなものだったが、かなり満足感のある一皿になっていた。

3人は続けて、サラダにも手をつけていく。

「ほう……これも美味しいな」

「生の野菜食うの苦手だけど、この液体のおかげでめっちゃ食える！」

「このサクサクしたのもいいわね。これだけでも食べられそう」

これまた、ジルバート、ガル、シャロから喜びの声が上がった。

サラダにかかっているシーザードレッシングは、自家製ながらかなり上手く出来ている。

クルトンもオリーブオイルで焼き上げたものに塩が軽く振ってあるので、これだけでもお酒のつまみになりそうな感じに仕上がっていた。

そんな美味しい料理は、腹が空いていたジルバート達の胃袋にあつという間に吸い込まれていった。

しっかりと完食したジルバート達の所へ、シュージがのしのと歩み寄っていく。

「お気に召しましたか？」

シュージの質問に、ジルバートが笑顔で答える。

「ああ、とても美味かった。シュージと言ったか？」

「はい、シュージと言います。えっと、貴方はギルドマスター様ですよ？」

「様など付けなくていい。俺はジルバートという。ギルマスかジルとも呼んでくれればいい」

「では、ジルさんとお呼びしますね」

お世話になるギルドのマスターということで、シュージは少し緊張していたのだが、ジルバートは快く対話に応じてくれた。

「この料理はシュージが全部作ったのか？」

「いえ、僕は少し手伝ったのと、指示を出ただけです。ほとんどリックとカインとメイが作ったと言っていると思います」

「そうなのか？」

話を振られた見習い組のリック、カイン、メイは、ジルバートに元気良く答える。

「おう！ 頑張って作ったぜ！」

「まあ、ほとんどシュージの教えのおかげかな」

「シュージ様はとても優しく丁寧に教えてくださりました」

そんな見習い組の言葉にジルバートは頷くと、改めてシュージの方を向く。

「シュージ、これから用務員として働くそうだな」

「はい」

「キリカのお眼鏡に適ったのなら俺からは文句はない。むしろ、これだけ美味しい料理が作れるなら、こちらからお願いたいくらいだ」

ジルバートのにも、シュージの加入は問題がないようだった。

「そう言ってもらえると嬉しいです」

「恥ずかしいことに、しっかりと料理を作ることのできる者がいなくてな。用務員の仕事をこなしつつ、見習い組……何ならその他の希望する者にも料理を教えてやってくれ」

「分かりました。精一杯努めさせていただきます」

「よろしく頼む」

それからジルバートとシュージはしっかりと握手を交わし、シュージは晴れて正式に蒼天の風の一員となった。



「ここがシュージさんのお部屋ですね」

「おお、広いし綺麗ですね」

食事を終えたシュージは、キリカにギルドの3階にあるギルドメンバーの居住スペースに案内されていた。

これからシュージが暮らすことになる部屋は、ちょっといいアパートといった印象だ。今はベッドとクローゼットくらいしかないが、色々ものを置きそうなスペースもある。

「新しい家具などは自己負担ですけど、好きに置いたりもしていいですよ」

キリカはシュージにそう説明をした。

「何から何までありがたいです」

「いえいえ。皆さん、シュージさんのご飯をとてども気に入って、これからの食事が楽しみだと言ってましたから、もつと待遇が良くていいぐらいですよ」

「十分過ぎますよ。行く当てもなかった僕を拾ってください、こちらこそ感謝しかありません。」

明日からのお仕事、頑張りますね」

「一緒に頑張りますよう！ 分からないことがあったら遠慮なく聞いてください」

キリカは頼もしい笑顔を浮かべながらそう言った。

「分かりました、ありがとうございます」

「では、今日はお疲れ様でした。おやすみなさい」

「おやすみなさい、キリカさん」

シュージは案内してくれたキリカと別れる。

部屋にはシャワールームが備え付けられていたので、シュージはシャワーをパパッと浴びてベッドに寝転がった。

ベッドは少し硬めだったが、硬めのベッドが好きなシュージからするととても快適だ。

大きな環境の変化によって知らぬ間に疲労が溜まっていたのか、シュージはすぐに眠くなった。

（明日からも頑張ろう）

そう心の中で誓いつつ、眠気に素直に身を任せるシュージだった。



シュージが異世界に来て2日目。

早めに目が覚めたシュージは、体を起こし、顔を洗って食堂へと向かった。

基本的にこのギルドでは、朝ご飯は各自適当に食べている。

冒険者として依頼を受けると、早い時間に出発しなければいけなかったりするため、一緒に食べようにも時間が合わないのだ。

だが、人間にとって朝ご飯はとても大事だと思っているシュージは、できればちゃんとしたものを食べてもらいたいと考え、まだ誰もいない食堂で料理を始めた。

使うのは、昨日シーザードレッシングのために作ったマヨネーズの余りと卵だ。

冷蔵庫にはもうほとんど食材がないので、あまり品目は増やせないが、せめてお腹に溜まるようにと、今回はたまごサンドを作ることにした。

食パンはありがたいことにかなり大量に残っている。

（たまごサンドなら冷めてもそれはそれで美味しいので、食事を摂る時間に差があっても大丈夫だろう）

それからシュージは黙々と1人でゆで卵を作り、その間になくなりそうなマヨネーズを追加で作る。

ハンドミキサーのようなものがあれば楽なのだが、生憎ないので、しっかりと泡立て器で作っていく。

シュージのフィジカルがあれば、その作業はそこまで苦でもない。

そして、ゆで卵ができたらボウルに移して粗めに潰し、マヨネーズと軽く塩胡椒を加えて味を調える。あとはそれを食パンの上に載せて挟むだけで完成だ。

それから少しキッチン内を探して、シュージは赤色のジャムを見つけた。

味見してみたところ、苺のジャムだったので、シュージはジャムサンドも同じくらい作った。

たまごサンドにジャムサンド。

これぐらいあれば普通の人なら十分な量だろう。食欲のある者達は、どちらかを多めに食べたりすれば満足できるだろう。

作り終えたシュージがそんなことを考えていると、まだ少し眠そうなキリカが食堂に入ってきた。

「ふわあ……あら、シュージさん？」

「おはようございます、キリカさん。早いですね？」

「おはようございます。受付業務があるので、基本は私が一番なことが多いですね。何をしてるんですか？」

「皆さんの朝ご飯を作りました」

「えっ、わざわざ作ってくれたんですか？」

キリカは驚きながらそう口にした。

「このギルドに用務員として雇われたなら、皆さんのサポートをできるだけしたいと思ひまして」

「そんな無理にしなくても大丈夫ですよ……？」

「はは、無理なんてしてないですから大丈夫ですよ。元々早起きなタチですし、喜んでもらえるのは嬉しいですから」

「シュージさん……ふふ、ありがとうございます。絶対皆んな喜びますよ」

「それなら良かったです。丁度できましたから、どうぞ」

早速シュージは、キリカにたまごサンドとジャムサンドを載せたお皿を手渡す。

「ありがとうございます。……んんっ！ これ、美味しいですっ！」

料理を受け取ったキリカは、まずたまごサンドを口に運んだ。

そして、一口食べてすぐに驚きの声を上げた。

「卵だと思ひますが、なんか不思議な風味がしますね？」

「マヨネーズの風味ですね。昨日のサラダにかかっていたシーザードレッシングも、マヨネーズを



もとにして作ったんです」

「そう言われてみると味が少し似てますね」

「この辺りでは作られていないんですかね？」

「そうですね、食べたことないです。これだけ美味しいなら、レシピ登録をしてもいいかもしれませんね」

「レシピ登録ですか？」

「シュージの質間にキリカが願く。」

「はい。新しくて美味しい料理とか調味料を作った際は、商業ギルドに登録して、レシピとして販売するんです。そうすると、レシピの使用料が登録者に一部支払われます」

「なるほど、そういうものがあるんですね」

「とりあえず、このギルドの皆さんに食べてもらって、誰も知らなかったら登録していいと思いますよ。ジンバさんは遠い国から来ましたし、ギルドマスターも仕事柄、色々な場所に行っていて、食文化にもそこそこ詳しいですから」

「分かりました」

「と、難しい話はこのくらいにして、今はこの美味しい朝ご飯を堪能たんのうしますー！」

「はは、そうですね。遠慮なく召し上がってください」

それからキリカを始め、後から来たメンバーにもたまごサンドは大好評だった。

誰もマヨネーズは知らなかったため、近いうちにマヨネーズやたまごサンドを商業ギルドに登録しに行くことになった。

そして、ギルドメンバー全員が、この美味しい朝ご飯に感動したようで、負担じゃなければひまた作ってほしいという話になる。

シュージは全く負担とは思っておらず、自分の分を作るついでなので、その申し出を快く了承した。



朝ご飯を食べ終え、まだギリギリ朝と呼べるくらいの時間に、シュージは見習い組の3人とヤタサの街の市場までやってきていた。

この市場は、大通りの両側に様々な出店が並んでいる。

食材から装飾品まで、お店によって様々なものが売られていて、見て回るのに相当時間がかかりそうな賑わいを見せていた。

「活気が凄いですね」

シュージの呟きにカインが応える。

「そうだね。店によって値段や品質も変わるから、結構お買い物も大変だよ」

普段は見習い組が、金銭感覚や目利きの訓練を兼ねて、決められた金額でしっかりと食材を扱うように言われているそうだ。

1週間分の食材を一気に買い込むらしく、シュージ達に渡された金額も相当なものだった。

体が資本の冒険者が多くいるため、食材はあればあるだけ消費されるそうだ。

ちなみに、大量の食材を買い込むにあたって、シュージ達には収納袋というものも渡されていた。収納袋は入れたものを異空間へ転送し、量にして100キロくらいまで保管することができるらしい。

魔道具と呼ばれる優れ物だ。

ただ、当然便利だけあって貴重なもので、収納袋1つで50万ゴールドもするという。

中にはもっと開口部が大きいものや、内部の時間がゆっくり進むようになるなどグレードの高いものもあるらしいが、その辺りは莫大な値段になるので、買うとしても今使っているサイズが一番良いらしい。

「お、ここが俺達がいつも買ってる肉屋だぜ！」

リックがシュージにそう声をかけた。

市場をキョロキョロと見渡しながらか歩いているうちに、行きつけだという肉屋に到着したのだ。

「おう、坊主達じゃねえか……って、おおっ!? な、なんか厳つい兄ちゃんもいるな？」

肉屋にいた店主のおじさんは、シュージの厳つい風貌を見て驚きの声を上げた。

「あ、どうも。僕は蒼天の風で働くことになったシュージと申します」

「中々すげえ体してるなあ」

「はは、恐縮です」

「おっちゃん、いつもと同じ感じの肉で頼む！」

「おう、分かった」

気を取り直して、リックが店主のおじさんにそう注文すると、店主のおじさんは色々な肉を準備し始めた。

「リック、何の肉を買うんですか？」

シュージがリックに質問をした。

「えっと、ビッグコックとグレートバッファローにオークとか！」

「全部魔物の肉なんですか？」

「そうだけ？ シュージは魔物の肉食わないのか？」

「そうですね……魔物を食べる習慣がない所から来まして」

シュージの言葉を聞いて、今度はメイが口を開く。

「魔物肉は安価で手に入るものも多く、焼いて食べるだけでも美味しいんですよ」

「そうなんですね」

シュージがさらに話を聞くと、昨日使った塩漬け肉も豚の魔物であるオークの肉から作られたも

のだった。

（そう言われてみると確かに、何だか地球で売られていた塩漬け肉であるベーコンなどよりも、旨味が強かった気がした）

そんな説明を受けつつ、シュージがお店の中を見渡していると、店の奥のバケツが目に入った。

「あ、店主さん。その奥のバケツに入ってるのって……」

「ん？ ああ、肉を切り分けた時の骨だな。すまんな、見苦しくて」

店主が気まずそうに言った。

「ああいえ。それも売り物だったりしますか？」

「いや、こいつらは捨てるな。犬の餌ぐらいにはなるかもしれないが」

「もし良ければ、譲ってもらうことって可能ですかね？」

「これとか？ 全然いいぞ。処分する手間がかからないから、ありがたいぐらいだ」

「ありがとうございます」

ということ、シュージは沢山の肉と骨を手に入れた。

かなり鮮度も良く、種類にもばらつきがあるので、これらを使って色々と出汁を取ってみようとシュージは考えていた。

やはり、美味しい食事に出汁は欠かせないので。

（それに、すじ肉もちゃんと料理すれば、美味しく食べられるものもあるだろう）

「シュージ様、それらは一体何に使うのですか？」

メイが、普通は捨ててしまう部位を手に入れて喜んでいるシュージを見て、不思議そうに尋ねた。「出汁という調味料のようなものを作るのに使うのですが、知りませんか？」

「ダシ、ですか？ 聞いたことないですね」

「これが中々美味しいんですよ」

質問してきたメイを始め、リックやカインも出汁を知らない。

（この世界には出汁を取るといふ文化はないのだろうか）

そんなことを思いつつ、シュージは見習い組達に案内されながら市場を練り歩き、いつもお世話になっているお店を教えてもらったり、シュージが個人的に買いたいと思ったものも、自費でいくつかが購入した。

先日倒したブラックウルフの報酬や、給料の半分が前払いで既に渡されており、懐にはそこそこ余裕があるのだ。

中でも掘り出し物だったのは、市場のかなり端っこにあった海産物や干物などを扱う出店で見つけた、乾燥させた海藻類や煮干しだ。

それに加え、海沿いの一部の地域で作られているらしい味噌と醤油に魚醤なんかもあったので、シュージはかなりの量を購入した。

この辺りは内陸ということもあり、あまり海産物を食べる習慣がなくて売れなかつたらしく、値

段もかなりお安くなっていた。

ただ、日本での価値を知っているシュージからすると、申し訳なく感じるくらい安かったので、ポテンシャルのある食材だということをもっと広めてあげたいなと考えていた。

レシピ登録という制度を利用して美味しさを広められれば、こんな市場の端っこで細々と商売をしなくて済むかもしれない。

店は週に1回この時間に出しているそうなので、今度この店の商品で作った軽食でも差し入れてあげようと密かに思うシュージだった。

そんなこんなで、有意義な買い物を終え、皆んなで仲良くギルドに帰るのであった。

第3話 異世界食材

買い物から帰ったシュージは、キッチンで軽く仕込みをしつつ、ギルド内の掃除に取りかかることにした。

先程市場で手に入れたオークとビッグコッコ、グレートバッファローの3種類の骨に、お湯で軽く火を通したり、水で洗ったりしてから、それぞれ鍋に長ネギと生姜に似た野菜と共に放り込み、じっくり弱火で煮込んでいく。

20分おきくらいにアク取りをしつつ、空いた時間を掃除に充てる。

まずは、ロビーや受付周りを掃除することにして、先代の用務員さんが残してくれたメモを頼りに掃除用具などの準備をしていく。

ちなみに、服は用務員用の制服があったので、シュージはありがたくそれを着させてもらっている。

それは前世で清掃員が着ていたようなつなぎの制服で、しかも何着かもらえたので、掃除をする時と料理をする時に着替えれば衛生面もバッチリだろう。

ということでシュージは、黙々と掃除を始めた。

バケツとモップを使って床の掃除をし、机などは綺麗な布巾、床や壁の落ちにくい汚れは雑巾でゴシゴシと擦っていく。

こういう細々とした作業はシュージの性分に合っていて、格闘技をやっている時なんかよりも心にゆとりを持って取り組むことができていた。

「ただいま帰りましたわ」

すると、ロビー周りの掃除が一段落したタイミングで、女性の声が入り口の方から聞こえてきた。そちらに顔を向けると、そこには綺麗な金髪を縦ロールにし、吊り目で強気そうな、10代後半くらいの少女が立っていた。

「あら？ 見慣れない方がいるわね？」

そんな少女の問いに、シュージは答える。

「あ、どうも。昨日から用務員として雇われました、シュージと申します」

「へえ、昨日の今日で掃除なんて殊勝な心がけね。私はアンネリーゼよ。稀代の天才大魔法使いなんだから、敬いなさい？」

「お、アンちゃんお帰りなさい」

アンネリーゼとシュージが話していると、受付の裏からキリカがひよこつと出てきた。すると、アンネリーゼが焦った様子を見せる。

「ちよつと、初対面の人がいるんだからちゃんとアンネリーゼと……！」

「はいはい、依頼は終わった？ 1人だったけど、ポカしてない？」

「ふふん、私にかければちよいものですよ！」

「そっかそっか、偉いね」

「ふわあ……って、頭などでするんじゃないわよ！」

「えー、嫌なの？」

「い、嫌とは言っていないですわつ。そんなに私のツヤツヤサラサラな髪を撫でたいなら、好きにするといいわつ」

口調や雰囲気からして、ちよつと気難しい子かなと若干思ったシュージだったが、キリカとのやり取りを見ていると、何だか微笑ましい気持ちになった。

「全く……シュージも、気軽に私をなでとかしちゃダメですよ！」

アンネリーゼの言葉に、シュージは少し戸惑いながら答える。

「それはしませんが……」

「その大っきい手でなでなでとか、ダメですわよ！」

「は、はい？」

そう言い残すと、アンネリーゼはギルドの階段を駆け上がっていった。

「えっと、どうということなんでしょう？」

「ふふ、可愛いでしょう？ アンちゃんは褒められたがりなんです。今の言葉も、本心ではシュージさんの大っきい手でわしわし撫でて褒めてほしいってことですよ」

アンネリーゼの気持ちをキリカがそう代弁する。

「な、なるほど？」

「アンちゃんはまだまだ若いのに、魔法使いとしての腕と才能は特別高いんです。このギルドでも一番と言っていていくらい。……でも、ちよつと過去に色々あって、素直に甘えられない難しい子なんです。だから、アンちゃんのこととは存分に甘やかしてあげてください」

「ふむ……分かりました」

キリカの言葉にシュージは素直に頷いた。

「多分、泊まりがけでの依頼で疲れてると思いますから、まずは美味しい昼ご飯とかで労^{むさ}ってあげるといいかもしれませんねっ♪」

「はは、そういうことなら任せてください。沢山食材がありますから、昨日よりも手の込んだものを作れると思います」

「それは私も楽しみになっちゃいますね」

丁度掃除も一段落したということで、早速シュージは昼ご飯を作ることにした。



「あ、シュージ様。お昼ご飯の準備ですか？」

シュージが昼食を作ろうと厨房に向かうと、食堂にいたメイに声をかけられた。

「そうですね、今からでしょうかと」

「手伝いますよ」

「助かります。リックとカインはいないんですかね？」

「2人は前衛職なので、ジル様に稽古を付けてもらってます。私は魔法の座学をしました」

「皆さん頑張ってる偉いですね」

シュージが褒めると、メイは嬉しそうな表情を浮かべる。

「えへへ……えっと、今日は何を作るんですか？」

「折角色んな出汁が取れたので、今回は鶏ガラスープを使った料理を作ろうかと」

「鶏ガラスープ、ですか？ あ、この沢山の大鍋の中にある？」